

## ● 最優秀賞

# 意思決定型授業で公民的資質の基礎を育てる

愛知県江南市立門弟山小学校 たかはしこうじ  
高橋宏滋

## 1 意思決定型授業の必要性

### (1) 公民的資質の基礎

社会科の目標は、「公民的資質の基礎」の育成である。では、「公民的資質の基礎」とは何か。このことについては『小学校学習指導要領解説社会編』に、次のように記述されている。

公民的資質とは、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を意味している。したがって、公民的資質は、民主的、平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。こうした公民的資質は、これからの国際社会において、日本人として主体的、創造的に生きていくために必要な資質である。

ここで着目すべきは、「民主的、平和的な国家・社会の形成者」に必要な資質と明示している点である。国家・社会の形成者は、単なる構成員とは違う。形成者は、自らの意思で、よりよい社会を築き上げようとする主体でなければならない。今の社会に上手く適応して生きていくだけでは、形成者としては不十分なのである。

### (2) 意思決定型のねらい

社会科の授業を、大きく次の3つに分類する。

- A 知識理解型
- B 疑問追求型
- C 意志決定型

Aの知識理解型とは、例えば、「早く火を消すための消防署の工夫を調べよう」など、知識を獲得することが目標とされる型の授業である。Bの疑問追求型とは、例えば、「駅前商店街がシャッター通りになったのはなぜだろう」など、疑問を解き明かすことが目標とされる型の授業である。こちらはAと異なり、どちらかと言えば思考力を育成することに重点が置かれている。しかし、最終的には一つの認識にたどり着くことで授業の目標が達成されるという意味では、知識理解型と同じである。A・B二つの型は、最も一般的に行われている社会科の授業だろう。これらの授業によって子どもが獲得するのは、社会認識である。社会科学習において、社会認識の形成は重要な要素である。確かな社会認識の形成なくして、社会科学習とは呼べない。しかし、それだけでいいかと言えば、そうではない。認識は、それを実生活の中で活用できたときにこそ意味をもつからである。

そこで、Cの意思決定型の授業について説明する。意思決定型とは、例えば「新しい環境センターをどこに造るべきか」というように、問題に対する最もふさわしい解決策を考え、意思決定することを求める授業である。A・Bが社会認識の形成を目標にしているの

に対し、意思決定型は、獲得した社会認識を活用しながら価値判断力、意思決定力を育成することが目標なのである。

A・BとCとの違いは、先の項で述べた社会の構成員を育てるのか、形成者を育てるのかという考え方の違いである。すなわち、A・Bの授業では、社会の仕組みや人の営みを学ぶことで、社会に適応できる力を育てることができる。つまり、よりよい社会の構成員の育成が可能だ。しかし、今の社会を改善し、新しい暮らしを創造する力を育成するという意味では不十分である。社会の形成者としての資質を育てる授業にはなっていないのである。現在、多くの教室で行われているA・Bの型の授業が公民的資質の基礎の育成に直結しなかった理由がここにある。認識は育てたが、それを使いこなす力を育てなかったのである。一方、Cは、現実の社会に見られるような問題解決場面に必要な価値判断力や意思決定力、つまり認識を使いこなす力を育てる授業である。言いかえれば、公民的資質の基礎を培い、社会の形成者を育成する授業なのである。

### (3) 意思決定型の特徴

意思決定型の授業は、課題の設定に大きな特徴がある。課題は基本的に次のような構造になっている。

今〇〇が問題となっている。この問題に対して、あなたは□□の立場として、どのような解決策を選択するか。

先に示した環境センターの例も同じ構造である。つまり、「今、△市で新しい環境センター建設の問題が起きている。この問題に対して、もしあなたが市長なら、どの候補地を最善策として選択しますか。」ということだ。いくつかのポイントを示す。

#### ポイント1 仮定であること

「今〇〇の問題に直面している」という仮定をするのである。現実の社会で起きている問題である必要はない。もちろん現実の問題を取り上げる場合もある。しかし、それを子どもが実際に解決することは不可能だ。よって、子どもが考えた解決策も仮説に過ぎない。

#### ポイント2 立場を設定すること

現実の問題が解決困難なのは、立場によって最善策が異なるからだ。異なった立場で各々が主張し合うために、議論が空転する。そこで、誰の立場で考えるのかを設定する。この立場は、高所から全体を俯瞰できる位置にある人物であることが望ましい。

#### ポイント3 正解がないこと

ほとんどの場合、解決策は一つではない。唯一の正解と呼べるものが見つからないのが現実である。あるのは、現時点でのよりベターな選択である。そこで、正解のない問題を取り上げ、最善策の選択を子どもに求めるようにする。価値判断、意思決定する力を育てることが目的なのであるから、正解は必要ないのである。

## 2 研究実践

本研究では、平成15年度・17年度に実施した、小学校6年社会科『3人の武将と全国統一』の二度の実践を取り上げる。そして、二つを比較しながら、意思決定型授業における指導の工夫とその有効性について述べていく。

### (1) 15年度実践の経過

#### ア 学習課題

今の日本の総理大臣を選ぶなら、3人の中の誰に投票するか。

#### イ 授業の経過

##### 【第1・2時】 3人の業績を調べよう

まず、教科書の『3人の武将と全国統一』

の単元を通読して時代の全体像を把握し、その後、教師側から先の課題を提示した。

ここでの情報収集は、KJ法を使った。付箋紙を大量に用意し、3人の業績を1つ見つけるごとに、1枚の付箋紙にその内容を記入させていくのである。児童には、「1人の人物につき最低10個は見つけましょう。」と呼びかけた。「1つ見つけるたびに付箋紙が1枚増える」ということが、児童にとっては喜びとなったようで、皆集中して作業を進めた。

第2時でも、付箋紙に業績を書き出す作業を続けた。この時間には、教科書と資料集に加えて、児童が家から持ち寄った資料と、教師が用意した資料を用いて情報収集した。

### 【第3時】 人物像を明らかにしよう

第3時には、児童が書き出した付箋紙を、グループで内容ごとに分類し、用紙に貼っていった。

ここでは、政治、経済、軍事、外交、教育・文化の5項目で分類させた。本来ならどのような項目で分類するかも考えさせるべきである。

しかし今回は、児童がKJ法を初めて行うこともあり、方法を学ぶという意味で項目は教師が示した。ここでのグループは、各班4人の生活班を使った。グループで3人の業績を検討しながら分類、整理していくのである。児童は、付箋紙に書かれた業績が、5つの項目のどこに分類されるかを話し合いながら作業を進めていった。グループで活動するのは、お互いの情報を共有するためである。

### 【第4・5時】 さらに情報を集めよう

第4時には、さらに情報を集めるための方法を話し合った。

児童からは、市の図書館、博物館、電話、メールなど、さまざまな方法が出された。その中から、市の歴史民俗資料館へ出かけることと、博物館の学芸員などの専門家にメールで質問すること、地域でのアンケート調査を実施することが決まった。アンケートは、授

業後に時間外の活動として行った。回答は合計200件ほど集まった。近所の家、同じ通学班の子の親が中心だったが、スーパーマーケットで調査した子もあった。第5時には、アンケート結果を集約し、書かれていたことを皆で読み合った。集約した結果は、徳川家康が1位であった。アンケートなどの新たな情報が加わった段階で、三度目の意思決定をさせた。

### 【第6時】 討論に備えて情報を集めよう

第6時には、次時の討論に向けての意見づくりを行った。

最初に、これまでの情報を総合して個人でノートに意見を書いていった。各自の意見がおおよそまとまったところで、同じ人物を選んだ児童同士が集まり、情報の交流を行った。いわゆる作戦会議である。

ここでは、話し合いの中で、自分の根拠に新たな根拠を付け加えていくことがねらいである。同時に、同じ情報を持った児童と出会うことで、自分の意見に自信を持つことにもなる。さらに、情報を交流するためには、他者への説明を繰り返し行うことになる。自分で声に出して説明することで、認識がより確かになる効果もある。

### 【第7時】 よりよい日本をつくるのは誰か

全体での討論でまず話題になったのは、信長の性格である。気性の激しさで増え続ける犯罪の防止に効果があるというのである。この時、校区周辺で不審者による事件が多発しており、児童にとって犯罪防止は最も身近な問題だったからである。

しかし、これには多くの反対意見があった。「厳しさだけでは国民に信頼されない」「厳しすぎたために信長は部下の反乱を受けた」というのがその理由である。討論で話題になったのは、以下の内容である。このように現代の問題と3人の人物像を関係付けながら討論は行われた。

信長	①楽市楽座と景気回復 ②関所の廃止と高速道路問題 ③激しい気性と犯罪防止・政治家の汚職防止 ④神学校の建設と学力低下
秀吉	⑤刀狩りと犯罪防止 ⑥検地と脱税の防止 ⑦大阪城の建設と高い技術力 ⑧低い身分からの出世と国民の気持ちの理解 ⑨二度の朝鮮出兵と北朝鮮問題
家康	⑩ねばり強い性格と環境問題への取り組み ⑪穏やか性格と消費税廃止 ⑫対オランダ貿易と外交のうまさ

#### 【第8時】 学んだことを振り返ろう

討論を経ての最終的な意思決定をさせた後、今回の学習で学んだ成果を文章記述によって振り返らせた。

<p>今の日本の総理大臣を選ぶなら秀吉に投票する。以下その理由を述べる。まず秀吉は信長から受け継いだ全国統一という夢をやりとげた。というのは、今の日本では国民が信用してくれるということであり、あとは行動力と決断力さえあれば日本はうまくやっけていける。秀吉はその2つの力を持っているので秀吉にした。次に秀吉は庶民の気持ちを一番わかってくれると思う。それはもともと身分の低い武士の子に生まれてきたことや、刀狩りを行って争いがおきないようにしたことからわかる。さらに秀吉は、その刀狩りで取り上げた武器は大仏づくりに使っていて、庶民の利益のことも考えている。このようなやさしさ、行動力、決断力が今の日本に必要だと考えるから秀吉に投票した。しかし、秀吉は、全国統一という夢をやりとげたにもかかわらず、朝鮮を2度もしんりやくしようとしてよくばってしまった。そのことがなければ秀吉はも</p>
---

っとえらくなれたと思う。しかし、この根気強さも今の日本に必要だと思う。

今回の授業で今の日本の総理大臣には次のような力が必要だとわかった。まず、秀吉のように失敗しても再度ちよせんするような根気強さ。これは今の日本の経済をたてなおすのに必要だと思う。この根気強さが今の日本には見られない。次に信長のようなきびしさが必要であるといえる。犯罪をきびしくとりしめることができれば犯罪が減っていくだろう。しかし、きびしすぎてもいけないだろう。それはきびしすぎると国民に信用されなくなってしまふからである。さらに必要とするのは、国民を思う気持ちだろう。秀吉のように、身分の低い武士の子に生まれてきたのなら庶民の気持ちが1番わかるだろう。

以上のようなことからぼくが投票するのは、行動力と決断力、それを実行する根気強さを持っている人を選びたい。(略)

この児童のまとめから、秀吉の業績や人柄と現代社会の問題を関係付けることによって、秀吉という人物についての認識を深めていることが読み取れる。また、刀狩りや朝鮮侵略などの認識を総合的に価値判断し、日本の将来を見つめようとしている。さらに、国家の指導者に必要な資質を考え、秀吉が「行動力」「決断力」「根気強さ」を備えた人物であると結論付け、総理大臣にふさわしい人物であると意思決定している。つまり、一つ一つバラバラであった秀吉の業績をつなぎ合わせることで新たな意味を獲得し、その意味を国家の指導者の資質という視点から捉え直すことで、より上位の概念にたどり着いているのである。この実践の成果をまとめてみる。

- ① 現代社会の問題と関係付けることで、3人の武将の業績の意味を認識した。
- ② 日本の将来を考えるという有権者の立場に立つことで、人物の業績を総合化し、価値判断した。



ろな決まりを厳しく作らなければなりません。決まりを厳しく作るには、頭が良くなければなりません。だから、頭がいいと言えます。こんな頭が良く家来に優しい人は、家康しかいません。なので私は、家康の家来になりたいです。

### 【第5時】 天下統一ゲーム

論戦で天下統一を目指そう

天下統一ゲームのねらいは、次の2点である。

- ① 3人の業績を根拠に「誰の家来になるべきか」を討論することにより、3人の業績や戦国の時代背景についての理解を深める。
- ② 1対1で討論することにより、討論技術と表現力の向上を図る。

このゲームに、児童は大いに喜んだ。一人あたり2回から3回ほどの対戦を行ったのだが、日頃ほとんど発言しないような児童からも、もっとやりたいと言う声が上がった。1対1であることや3分間という短い対戦時間であること、即座に判定されること、負ければ相手の家来になることの緊張感が、雰囲気盛り上げることになったのだろう。また、自分が戦国武将になったつもりで、学んだ成果をぶつけ合い論争するという設定も、知的興奮を喚起するのに効果的であった。

#### 天下統一ゲームの進め方

- ① 実在の戦国武将の名前を書いたカードを学級の数だけ用意する。
  - ② 児童全員にカードを配付し、一人ずつ実在の戦国武将名を割り当てる。
  - ③ 3人のうち、誰の家来になるかを決定する。
  - ④ 選んだ主君別にカードを集め、3つ①のグループ（信長軍・秀吉軍・家康軍）をつくる。
  - ⑤ 3つのグループから、教師が無作為にカードを抽出し、対戦相手を決定する。
- （信長軍の○○対秀吉軍の●●のように、1対1の対戦を組む。対戦は6組、つまり合戦場を

6カ所つくる。）

- ⑤ 対戦しない児童は、6つの合戦場に別かれて審判になる。
- ⑦ 対戦時間は3分間とし、1対1で論戦する。
- ⑧ 対戦終了後、審判員は、声、話し方、意見内容の3つの観点で評価し、総合判定を出す。（審判員は評価表を持ち、各項目10対9で採点する。）
- ⑨ 審判員の多数決で勝敗を決定する。
- ⑩ 負けた児童は、勝った児童が主君とする武将の家来になる。勝敗に従って教師がカードを移動する。（負けた信長軍の○○のカードを勝った秀吉軍のグループに移動する。負けたら、次の対戦は新しい主君の家来として戦う。）
- ⑪ 新しいカードを抽出し、2回戦目を行う。（⑤～⑩までを数回繰り返す。）
- ⑫ 最終的に最も多くの家来を集めた武将を天下統一とする。

### 【第6時】 よりよい日本をつくるのは誰か

先の天下統一ゲームは1対1の討論であったが、この時間は、学級全体で討論した。課題は、『日本の将来を考えたとき、誰の家来として天下統一を目指すべきか』である。個人の私利私欲ではなく、日本の将来を見据えて誰に天下を取らせるべきかを判断するのである。討論に備えて、この時間にも意思決定表を作成させた。次ページの意思決定表②は、家臣、農民、商人・職人、キリシタン、その他の項目を設け、それぞれの立場で誰が天下を取るべきかを比較し、項目ごとに◎○×で判定させた。一つ一つの項目を設定し、それぞれの立場で価値判断することで、より確かな根拠を伴った意思決定につながった。討論での発言も、天下統一ゲームのときとは異なり、3人が天下統一した後の社会の変化を予測した内容のものが続いた。

意思決定表②

日本の将来を考えたとき、三人の誰の家臣として天下統一を目指すべきか					
家臣の立場	農民の立場	商人・職人の立場	キリシタン	その他	その他
信長 ○軍事にすぐれている 争いにかかるとでも気があついで危険	×一向一揆の時にたおして農民たちのように弱みを見せられたり殺されてしまったから	○楽一・家康などをしていにくくしやすくさせてくれたから	○しかりとイ保偏してくれて貿易も有理にさせてくれたから	○公家はさんざんたたくけれど天皇は家たつたから	
秀吉 ×自分が天下を統一したあとに専横も出ているので多くの武士が死んだから	○刀狩りなどをやっていたときに使ったものをくれたり田を分けてくれたりしたから	×たいていことをやらない家康も信長のまわをばたけただけ	○禁止されて処刑をされてしまったから	○関白にうけた秀吉はいろいろと世話をしてくれているから	
家康 ○家康の引取りよばれたら強く武士の志士をとりつたりしていたから	○戸の町でまわしいくうしなどをしていってよくてくつたから	○江戸の町を栄えさせ商業をたくさんきつたから	×処刑をされたりしてごうもんにかげられたから	×強むてきに学問をやらされていふみをきかせられたから	

【第7時】学んだことを振り返ろう

この単元で学んだ成果を記述させた。15年度実践でも、児童はそれぞれに根拠を示し、誰に投票すべきかを述べていた。しかし、信長や秀吉など、個々の人物についての記述は詳しく書かれていたが、3人を具体的に比較する視点は弱かった。その反省をふまえて、17年度実践では2度意思決定表を作成させている。この実践における意思決定表の効果は、振り返りの記述から読み取ることができる。児童は、人物を選択した根拠をそれぞれの業績を比較しながら、価値判断、意思決定していったのである。

私は、家康の家臣として天下統一を目指すべきだと考える。そして信長と秀吉の家臣になるべきではない。まずなぜ信長と秀吉に天下を取らせるべきではないかを述べる。

はじめに信長という人物を一言で言うとごんこくである。例えば、延暦寺の焼き討ちや石山戦争で無差別に人を殺している。もし、信長が天下を取るようであれば、日本は戦争の絶えない国になるだろう。信長は性格がごんこくであり、子どもや大人、男や女などだれでも反対したものは殺しました。さらにそのようなたいどが家臣にもでています。その例は本能寺の変です。この本能寺の変で信長は明智光秀におそわれます。信長が光秀におそわれた理由というのは、信長が光秀に対して冷たいたいどで接して

いたからといわれています。なので、信長が天下を取ったら家臣との争いが絶えないと思うので信長にはつかえない。

次に秀吉という人物は、一言で言うとよくばりである。例えば朝鮮出兵で朝鮮の領土をとろうとしたり、キリスト教を禁止しても貿易だけは続け、よくばりだ。もし秀吉が天下を取るようであれば日本は、海外と戦争などの問題が多くおこる国になるだろう。秀吉はよくばりで問題が多い。朝鮮出兵も日本だけでなく海外までせいふくしようとした秀吉のよくぼうである。秀吉は、一度敗戦したが二度目も出兵させた。この二回の朝鮮出兵で多くの武士が死んだ。しかし、秀吉はその出兵の最中にお花見をしていた。これは許せない。さらに、秀吉は死ぬ前に「秀頼をたのむ」と言い死んだ。出兵で多くの人を死なせたのに、自分の子だけ守ってもらおうとした。このような人が天下を取れば、外国と問題をよくおこす日本になってしまう。

そこで家康という人物について考える。家康は一言で言うのがまん強い人間といえる。例えば、天下取りをぎりぎりまでがまんした。これはなかなかできないことである。もし家康が天下を取れば、日本は安全な国になる。家康はキリスト教を禁じ、貿易もやめた。秀吉のようによくばりではない。外国とのつきあいがなければ戦争を外国とやる確率がなくなる。これで外国との問題がなくなり安全だ。次は国内につい

てだ。信長とちがいざんこな性格ではないので、家臣をまとめることができる。さらに、全国を統一していて幕府を開けるほどの信頼があると言うことだ。なので国内も安全である。これが、もし私が戦国武将なら家康の家臣として天下統一を目指す理由である。(略)

### 3 考察

#### (1)なぜ児童は燃えるのか

意思決定型の授業に児童は喜んで取り組む。学力の差に関係なく、意欲的な姿勢が見られる。その理由は、先に述べた「仮定である」「立場を設定する」「正解がない」の3つポイントの効果による。粗く言えばゲーム感覚なのである。仮想現実の場面を設定し、自分が登場人物になりきって、シミュレーションを楽しむのだ。課題そのものに正解がないのであるから、知識の量だけで優劣はつかない。学力優位者が活躍して正解を出して終わる授業とは、全く様相が異なる。誰でも活躍できるのである。もちろん、シミュレーションをしていく過程で、新しい事実と出会ったり、思わぬ発見をしたりする知的興奮の体験が、意欲の原動力になっていることは言うまでもない。

#### (2)価値判断力・意思決定力は育ったか

見える学力と見えにくい学力があるとするならば、価値判断力・意思決定力は、極めて見えにくい学力に近い。今回の二つの実践における児童のまとめを読むと、児童はいくつもの情報をつなぎ合わせ、新しい意味を発見しながら判断し、自らの意思を決定している。この点からすれば、児童の価値判断力・意思決定力は鍛えられたことになる。しかし、現実の場面でどれだけ有効に働く力となっているかは不明である。本番で使える力かどうかという問題だ。本番というのは、もちろん現

実の公的社會問題に直面するような場面である。今回の二実践は歴史の授業であり、現実の場面と比べて虚構性が大きい。この二実践は、価値判断力・意思決定力を発揮する訓練としての授業なのだと言える。この見えにくい学力をより見えやすい形で評価するためには、現実の公的社會問題を教室に持ち込んでシミュレーションするような学習を仕組む必要がある。

#### (3) 意思決定表の効果

17年度の一番大きな改善点は、2枚の意思決定表の作成である。15年度では、場面だけを設定し、価値判断、意思決定を児童に預けた形であった。それでも児童は、懸命に情報と格闘しながら結論を出していった。17年度は、その部分に、意思決定表という支援をしたのである。児童にとっては比較の観点が提示され、一覧表の形で整理されたことで、3人の比較がより確かなものになった。項目ごとに◎○×で順位付けしたことも、判断力の訓練になった。

#### (4)今後の課題

現実社会の問題解決場面に直面したとき、使える価値判断力、使える意思決定力を育てる。それが、公民的資質の基礎、すなわち社会の形成者としての資質の育成につながる。これが二つの実践の出発点であった。結論から言えば、大きな手応えを感じている。児童が書いたまとめの内容を見ても、学習の過程で活発に思考したことが伺われる。意思決定型以外の授業では鍛えられない力が、この学習で鍛えられた。それは身に付けた認識を使いこなす力であり、問題に直面したときに自ら打開して進んでいく力である。今後必要なのは、より現実の場面に近い形での意思決定型の学習を行うことである。また、さらに効果的な意思決定表を工夫し、児童の価値判断と意思決定を支援していくことである。